

Title	ニヒリズムとはどういう危険か
Author(s)	生島, 弘子
Citation	メタフシカ. 38 p.137-p.149
Issue Date	2007-12-25
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12777
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ニヒリズムとはどういう危険か

生島弘子

0 ニヒリズムとはどういう問題か

我々はニヒリズムという語に何を感じ、この語で何を理解するだろうか。

何をしても、たとえあらゆることをしても、それが何になるだろう、甲斐が無い、意味が無い、答えが無い。このような気分を、恐らく何時の時代の何処の社会においても誰もが抱いたのと同様に、現代の我々も抱くだろう。このような気分をニヒリスティックと呼ぶのは奇妙なことではない。また或いは、本当のことは何も解らない、誰にも解らない、そのような絶望的な気分も、我々は抱くことがあるだろう。これもニヒリスティックと呼んで奇妙な感じはしない。我々はニヒリズムに陥っているのかも知れない。ではこの状態は、望ましいものなのかそうではないのか、意味あるものなのかそうではないのか、一体どのようなものなのだろう。

ニーチェと言えばニヒリズムの思想家である、これは間違いではない。しかしこれは厳密にはどういうことなのだろうか。我々が感じ理解することの出来るニヒリズム的なものが、ニーチェが問題としたニヒリズムと完全に重なるものとは言えない。ニーチェがニヒリズムと言う時、それはまさに「ヨーロッパのニヒリズム (der europäische Nihilismus)」(NF 5[71], KSA 12 S.211)であるからだ。何を語る為にニーチェはニヒリズムという語を用いたのだろうか。ニーチェのニヒリズム批判はニヒリズムの克服の試みであったと差し当り言えるが、では克服とはどういうことなのか、何故克服しなければならなかったのか。ニヒリズムが何故問題だったのかという問いは、ニヒリズムとはどういう問題だったのかという問いと同じである。

1 ニーチェは何をニヒリズムと言ったのか

ニーチェはニヒリズムを症候として見る。其処に生のどのような状態が示されていると彼は見るのだろうか。

1-1 生存の無意味

生存の無意味、そして生存をそのようなものとして否定することという意味でニヒリズムとい

う語が用いられるのは、八十六年以降である¹。(註1)

生存を無意味と感ずることは、意味付けられなさと言い換えられる。それは判断の出来なさである。

どのように価値判断するかすなわち価値評価様式は、道德の問題である。道德とは人間の生存条件を示すものであり、どのようにすれば生き延びられるかを訓育するものであるとニーチェは考える。道德は人間に或る一定の価値観を身に着けるよう強制するものである。それは命令であって、某かの理由による説明、説得ではない。そして、どのような道德であるかということとどのような人間であるかということとは相互作用的である。それぞれの民族にはそれ自身に固有の、それ自身にとって必然的な道德がある。その中で生立つ内に人間はその道德を自らの血肉にする。その道德は、それによって人間が生きることが出来る、その者の身体になるのである。

ニーチェは価値判断を生根機能と考える。或るものを価値付けることが出来るとはそのものを自らにとって有益なものとして、自らの為に利用出来るということである。価値付けるものと価値付けられるものの関係は、互いに差異的な力同士の関係である。力は自らを放出(entladen)しようとするものであり、どのような力であるかはその系譜が決定している。どのような自己とは違う(nicht-selbst)力に服従させられ、どのような別の(anders)力を服従させて来たか、どのような異他的な(fremd)力とどのような関係にあったか、そういう由来(Herkunft)が力の量と質を決定している。そして一つの生は諸力の関係の均衡として成立していると言える。

生存を無意味と感ずることは、生の根本機能の不全であり、生の頹廢の症候である。

1-2 ニヒリズムの進行

ニヒリズムの進行を述べる十三節からなる長い遺稿がある。そのレンツァーハイデ断片(NF 5[71], KSA12 SS.211)で述べられるのは、ニヒリズムがこの世における不確定性の感情から生じ、キリスト教的道德仮説(die christliche Moral-Hypothese)すなわち彼岸的な理想がそれに対抗する有効な手段であったということ、その道德によって生きる内に誠実性(Wahrhaftigkeit)という徳が訓育され、誠実性がまさにその理想を失墜させるということ、それは一つの解釈の没落であり、しかし別の解釈がまだ無く、人間は価値付けられなさというニヒリズムに陥っているということである。

此処から窺えるのは、ニヒリズムは何らかの価値を命令する理想とそれに服従し、それを自らの血肉とする人間との関係において、両者の権力関係の拮抗から生じるということである。こ

¹ ニヒリズムという語は八十年代の遺稿に頻出する。『ニヒリズム』(川原栄峰、1977)によれば、八十一年から八十五年の間の遺稿に見られるニヒリズムという語はロシア・ニヒリスト達、殆どテロリストであった彼等の思想を指すものと考えられる。ニーチェは当時のロシアにおけるアナキスト達の皇帝暗殺事件を新聞で読み、ニヒリストという語を受容した。ニーチェは彼等を高級な人間と見なし、彼等に偉大さの傾向を見、共感を覚えていたが、しかし同時に無気味さも感じていた。八十六年以降、ニヒリズムという語はより頻繁に用いられるようになるが、語の意味はより一般的になる。その語用にはポール・ブルージェの『現代心理論叢』を読んだことが大きく関係しているとされる。キリスト教とニヒリズムを結び付けるのはこの頃である。此処でニヒリズムという語が意味するのは、全ては虚偽である、全ては無価値・無意味であるとする態度、また生を否定する精神である。また八十六年にニーチェはドストエフスキーを読み、その影響も大きい。ドストエフスキーから得たものは超人のイメージと病人としてのキリスト者のイメージである。

れを説明して、別の断片がある。「1 ニヒリズムは或る正常な (normal) 状態である」(NF 9[35], KSA 12 S.350) という文から始まる遺稿は、ニヒリズムが両義的であり、権力の高まりの徴としての能動的ニヒリズム (der active Nihilism) であることも、権力の下降と後退の徴としての受動的ニヒリズム (der passive Nihilism) であることもありうると述べる。力同士の関係は根本的には戦いであり、それによって常に力は上昇したり下降したりしうる。それゆえニヒリズムは正常な中間状態とも呼ばれる。或る力が自己克服して新たなものとなる為に必要な必然的な過程だということである。「諸価値並びに諸価値の変化は、価値措定者の権力の生長に比例する。」(NF 9[39], KSA 12 S.353)

このように両義的なニヒリズムという状態が生じることには或る前提があるとされる。「2 この仮説の前提／どんな真理も存在しないということ、物事の絶対的性質や“物自体”は存在しないということ、このこと自体が一つのニヒリズムであり、それも最も極端なニヒリズム (der extremste Nihilism) にほかならない。」(NF 9[35], KSA 12 S.351) 此处で前提と言われている事態は、道徳に関して言うならば、従来の道徳からの乖離である。能動的或いは受動的どちらのニヒリズムの場合でも、道徳が人間が最早服従することの出来ないものとして現れたということ、それに従っても価値感情を得ることが出来ないものとして現れたということである。

この遺稿から、ニヒリズムは二つの側面から捉えることが出来る。価値付けられなさすなわち価値判断についてのニヒリズムと、真理の捉えられなさすなわち真理認識についてのニヒリズムという二側面である。

2 価値判断についてのニヒリズム

価値判断は道徳を形成する。ニーチェは自らの時代の道徳すなわちキリスト教的道徳を奴隷道徳として批判する。奴隷道徳の問題は何処にあるのか。ニヒリズムが価値判断の出来なさであるとなると、何故キリスト教は価値付けられなさに至るのか。

2-1 僧職的評価様式

『道徳の系譜』第一論文でニーチェは貴族的評価様式と僧職的評価様式という二つの判断様式について述べる。前者は「勝ち誇った自己肯定から生じ」(GM I.10, KSA 5 S.270)、「“良い”という根本概念を予め自発的に、すなわち自分自身から構想し、其処から初めて“わるい”という観念を作り出す」(GM I.11, KSA 5 S.274)。他方後者によって形成される奴隷道徳は根本的に反動であり、「先ず“悪い敵”を構想し、これを基礎概念とし、その模像・対照物として“善人”を、自分自身を案出する。」(GM I.10, KSA 5 S.274) 前者では価値の根拠が判断する者自身にあるが、後者ではそうではない。価値判断の様式は判断する者の由来に規定されている。価値とは生理学的感情である。感情は症候であり、其処には力関係が示される。或る物事について人が下す価値判断は、そのものはこのように価値付けられるということが示されると共に、その人はそのように価値判断する者であるということが、すなわち人間の類型 (Typus) が示されている。

貴族的評価様式では価値判断の際に、自分が良い、正しいということに自分以外の何ものからの保証も必要としない、他人からの承認を必要としない。他方、僧職的評価様式では、価値判断

する者は自己自身を価値の根拠とすることが出来ない。これが二つの評価様式の根本的な違いである。

僧職的评价様式は抑圧された者達の間で支配的になる。抑圧に苦しむ者達は自分自身の状況をどうにかして納得出来るものにしようとする。自分と対極に居る者を悪い (böse) と見なし、それゆえ自分は善良なのだとする、このようなやり方で自己肯定が可能になった。彼等は自らの抑圧状態を、弱さを、無力さを是認した。そしてそれ以降はそのような状態こそが求められるようになるのである。

自らの苦しんでいる状態こそが彼等の判断の基盤である。それと対極の性質や有り様は高い価値を置かれることは出来ない。しかし此処で否定されるものこそが、ニーチェが生の根本機能と見なすものである。

2-2 彼岸的理想

生が苦痛である者にとって生を否定する理想は有用である。彼等にとって生存は堪え難く、その苦しみを和らげようとして、彼等は麻醉的な理想を求める。別の世界に価値が置かれ、彼岸が価値の根拠とされると、その反対の生や生を形成する一切のものは価値を引き下げられ否定されざるをえない。ニーチェは何よりも生に敵対的な、生に対して否定的なものに危険を見て取る。

彼岸的な理想はこの世のもの、生の価値を引き下げる。人間を保護するほどその理想の権威は強化される。彼岸的な理想はそれによって人間が救われることが多く、大きくなるほど、生に対して益々否定的に、敵対的になる。その理想は生の根本機能を、自然的傾向を禁じるよう人間に命じ、人間を益々病気にする。

生存の無意味が問題である時、如何にして生存に意味を与えることが出来るか、とニーチェは問うのだろうか。むしろニーチェが繰返し語るのは、価値或いは意味とは生から判断されるということである。つまり価値判断しているのは生存自体である。生存の無意味というニヒリズムは、生存が自己自身を価値付けることが出来ないという状態である。何かについて価値判断することは、価値付けられるものの価値を示すだけでなく価値付けるものの類型を示す。何かを価値付けることは自己自身を示すことである。生存の価値付けられなさにあっては、価値付けるものと価値付けられるものと同じものであるということも自覚されていない。

3 真理認識についてのニヒリズム

従来の道徳についての疑わしさすなわち価値判断についてのニヒリズムが生じる前提は、真理についての疑いであるとニーチェは考えた。最も極端なニヒリズムとは、真理は認識出来ないという、認識についてのニヒリズムである。

3-1 認識と真理

ニーチェは認識を、また真理をどのように考えていたか。

彼の道徳批判によれば、従来の道徳において価値であり真理であるものとは彼岸的理想である。それは万人に共通の真理であり、個々人の差異によって違って現れるものではない。彼岸的な真理に対して万人は平等である。これを求めるよう道徳は人間を訓育し、そして人間は誠実性とい

う徳 (Tugend, virtù) を身に着けたとされる。

真理は共通のものではないとニーチェは考える。ニーチェが真理など無いと言う時に否定するのは、そのような万人に共通の透明な真理である。対象とそれについての認識内容の一致というプラトンとアリストテレス以来の伝統的な真理概念をニーチェは誤謬とする。客観と主観の間にあるのは一致ではなく「相等化」(シュスラー、p.249)である。「認識の真理についての問いで決定的であるのは、それゆえ、最早真理それ自身でも、ただ真理それだけでもなくて「生にとっての価値」なのである。真理——言い換えれば、先行的に正当性へと〔向きを〕整え合わされた確固とした諸対象性へと自らを向ける、正当性が有する接合態の全体——は、生にとっての価値であることが証示されているのである。このことでニーチェは(略)、真理を究極的かつ本来的な実在性としての生へとはつきりと還元しているのである。」(シュスラー、p.253)

真理の認識とは或るものを真理と判断すること、真と見なすことであるとニーチェは言う。それゆえ真理とは確実性の感情である。そして感情とは生理学的なもののなので、真理とは生によって判断されるものであるということになる。だがその生こそがまさに、生に敵対的な理想によって生かされ、その道徳を血肉化したものであるとすると、何が起こるだろうか。遺稿では次のように言われる。「あらゆる信仰は真と見なすこと (ein Für-wahr-halten) である。ニヒリズムの最も極端な形式は次のような洞察、すなわち、真の世界は全く存在しないがゆえに、あらゆる信仰、あらゆる真なりとの見なしは必然的に偽であるというものである。それゆえ、真なりとの見なしは遠近法的仮象なのであり、そのそもその由来は(我々がより狭められ縮小され単純化された世界を絶えず必要とする限りにおいて)我々の内にある／力の尺度は、我々がどれほど仮象性を、嘘の必然性を、没落すること無しに自らに容認出来るかである。」(NF 9[41], KSA 12 S.354) 真の世界は全く存在しない、と思うことは、彼岸的な真理に対して最早確実性の感情を抱くことが出来ないということであり、彼岸的な理想がそれを命じられた者の生を最早守らないということである。生を可能にするのは仮象性、つまり他人によって保証されることの出来ないものであるとニーチェは考える。彼岸的な真理は病人だ生を保護する、しかしそれは健康にすることではない。この真理の下で生は益々弱化し、感情は弱められる。

認識が遠近法的であるとする、真理と見なされるものはそれぞれのパースペクティヴによって異なり、或るパースペクティヴから真理と見なされたものの正当性はその同じパースペクティヴには立たない他人によって保証されたり証明されたりは出来ないということになる。ニーチェは真理を新たに規定し直すのである。ニーチェの考える真理性 (das Wahrheiten) とは、第一に生 (Leben)、第二に自己 (Selbst)、第三に自由 (Freiheit)、第四に身体性 (Leiblichkeit)、第五に遠近法性 (Perspektivität)、第六に正義 (Gerechtigkeit) であると考えられる。(Stegmaier, 1985)

遠近法的真理という、ニーチェが新たに規定しようとする真理の意味においては、或る人間が自らに固有の真理を主張し、他人をもそれに服従させようとするとしても、実際他人がそれに服従しないこと、つまり同じ真理を持たないことは、その人間の真理の正当性を損うことにはならない。この正当性の自覚と、自己がそのものとしてあることによって必然的に現れる非自己すなわち自己を限界付けるものに耐えられる強さが必要になる。遠近法的真理は互いに差異的なも

の同士の並立を許す。そして自己にとって異他的なものの存在は無意味なものではなく、自己を自己としてあらしめうる必要条件である。自己自身にとって正当な真理を示すことは自己と異他的なものとの差異を示すことであり、両者を可能にすることである。

3-2 誠実性

徹底的ニヒリズムとは万人に共通の真理が無いということである。真理が共通のものでなければならぬという命令が最も強力に人間を服従させるものであり、人間がそれに服従している内は、共通の真理が無いということは一切の真理が無いということと同じことである。

「徹底的ニヒリズム (der radikale Nihilismus) とは、もし認識される最高の価値が問題であるならば、生存の絶対的な保たれえなさの確信であり、また、我々は彼岸を定立する権利や“神の”であり道德の体现であるような、事物の背後にある本来のものを定立する権利を全く持たない、という洞察である。／この洞察は大きく育て上げられた“誠実性”の結果である。それゆえまさに道德についての信仰の結果である。」(NF 10[192], KSA 12 S.571) 誠実性とは真理への意志 (Wille zur Wahrheit) である。生長の結果、誠実性は自らを訓育したところの道德にも向き、誠実性が自己自身についても誠実であろうとする、とニーチェは考える。レンツァーハイデ断片の第二節には次のように言われる。誠実性は「ついには道德自身に立ち向かい、道德の内に目的論を、利害を含んだものの見方を発見する。——そして、この長期に亘って血肉化された欺瞞を絶望の中で打捨てようとするのだが、実は欺瞞に対するこの洞察が丁度刺激剤として作用するのである。ニヒリズムへの刺激剤として。」(NF 5[71], KSA 12 S.211)

誠実性は何故、どのようにして、自己自身へと向かうのか。人間は道德によって訓育される、その道德に相応した者になる。人間が道德を血肉化すると、その道德を命じる外的強制は必要ではなくなる。嘘を吐いてはならない、隠してはならない、という命令は、その命令を発する権威から独立し、嘘を吐くまいという人間の意志になる。誠実な者は自らの姿を偽ろうとせず、誠実に示そうとする。偽りではない姿とは見る者によって変わったりしないものである。それゆえ、自分が思うところの自分の姿と他人が思うところの自分の姿は違ってはならない、誰が見ても、自分で見ても同じ、等しく、変わらない姿でなければならない。更に自分のことだけではなく、他人のことも、あらゆることは透明に、共有され、知られているのでなければならない。此処で求められている真であることとは、共通性・不変性であり、非遠近法的であることである。そして自分にも他人にも共通で均質なものであることは常に、他人と確かめ合うことを伴う。自分の知っている事柄は他人にも知られていなくてはならない、仲間内だけではなく異なる集団に属する他人からも、見も知らぬ他人からも、あらゆる他人からもである。そして更に、そのような承認が可能である為には自分と他人とは等しいものでなければならない、全ての人間は等しく均質なものでなければならない。神の前に、真理の前には、万人は平等なのである。

誠実な者は真理を求める、しかし物自体としての真理、すなわち均質な真理に生は到達しえない。誠実性の要求する真理と生の要求する真理との不一致は、誠実な者にどんな真理もありえず、それゆえ価値も無いと思わせるに至る。

誠実性を、生存・実在について何ものも価値を持たずそれゆえ破壊されるに値すると考えるこ

とだとすると、「実在の価値についての問いの答えのこの徹底性がまさに“ニヒリズム”を一般に特徴付けるものなのである」(Ibáñez-Noé, p.9)と考えられる。「ニーチェの計画は、誠実性によって徹底的に不完全なニヒリズムを克服することである。つまり古い価値、それらは既にその価値を失っているのだが、その破壊によって、そしてまた権力への意志を新しい価値原理として確立すること(あらゆる価値の価値転換)によって。誠実性はこの意味でニーチェが“完全なニヒリズム”と呼ぶものである。」(Ibáñez-Noé, p.17)²

誠実性は生が非真理を必要とするものであることを洞察する。誠実性が生と合意に至ることが出来た時が、ニヒリズムの克服の時である。それは、真理と価値は一体であり、それは生から判断されるものである、という真理と価値の意味付け直しがなされた時である。ニヒリズムという状態は、価値と真理が生から解離することである。認識しようとする者にとって、今や知られねばならないのはその者自身である。生をどのようなものと見なすか、生の根本機能についての洞察もまた、洞察する者の生の状態を示す症候である。透明な真理を求めるよう訓育された者が、そのような真理ではないものを必然的に必要とするものとして生を、すなわち自己自身を洞察する。彼は自己自身を仮象への意志として誠実に認めねばならない。誠実性がニヒリズムの克服の契機となりうるのはこの点においてである。

4 神の死

ニーチェはキリスト教をニヒリズムと呼ぶ。しかしまた、ニヒリズムとは神の死である。キリスト教の神はニヒリズムを初めから孕んでいる。

4-1 ニヒリズムとしてのキリスト教

キリスト教的理想、すなわちキリスト教の神はどのような由来を持つのだろうか。

それぞれの民族は自らに固有の神を持つとされる。そのような民族の神はその民族自身の権力感情の昂揚の表れである。このような民族の宗教では、権力が、生が肯定されている。しかしキリスト教における神には、生に対する、自然に対する敵対が示されているとニーチェは見る。キリスト教はユダヤ教から生じた。ユダヤ教はそもそも民族の宗教でありエホバはイスラエル民族の権力感情の徴としての民族の神であったが、この民族の没落の時に変質した、とニーチェはその歴史を解釈する。ユダヤ教の本能、すなわち「存在か非存在かの選択の前に立たされた時に、あらゆる犠牲を払って全く薄気味悪いほど意識的に存在の方を選び取」(AC 24, KSA 6 S.191)ろうとする傾向、これを貫徹した代価は「全自然の、全自然性の、全実在性の、外的世界と同じく内的世界の全体の、徹底的偽造」(ibd.)であり、それまでの生存条件から自己を分離し、反自然

² この論文ではニーチェ前期の芸術思想と後期のニヒリズムとが、文化というキーワードから連続的に論じられる。その文化という概念は、「人間意志にのみ基づき超越的な基礎に基づくのではない、歴史的世界という概念である。そこにおいて人間性が自らにのみ直面し他の何ものにも直面しない、そのような世界の概念である。」(Ibáñez-Noé p.21)そしてこの論文は「神の死の時代における文化的一体性は、全体としてのニーチェ哲学の本質的方向性の観点から、ニヒリズムと権力への意志の生成する自己意識という二つの出来事に要求される一体性として、把握される必要がある。言い換えれば、誠実性と芸術との一体性はニヒリズムと権力への意志の自由との一体性に基づけられるということである」(Ibáñez-Noé, p.22)と結論付けられる。

的なものを自己の生存条件とするようになった。イスラエル民族の神はその民族の没落時に捨てられるべきであったのに、固執され、没落した民族が抑圧と苦痛の内にあつて尚も彼等の神が居続けられる為に、神概念は一変せしめられた。

このユダヤ教の神概念を受継いだキリスト教において、最高の理想は実在性に対する本能的憎悪に由来を持つ。実在性とは、差異的な諸力の均衡として生が成立すること、異他的な力があることであり、それに対する憎悪とは「あらゆる接触 (*Berührung*) を余りにも深刻に感受するので、一般に最早“接触され”たがらない、極度の苦悩と刺激の能力 (*extreme Leid- und Reizfähigkeit*) の結果である。」(AC 30, KSA 6 S.200) これがキリスト教的理想によって生きられる人間の根本規定である。キリスト教の最初の地盤は「内的に粗野となって自らを引裂く人間、強いがしかし出来損い (*missrathen*) の人間」(AC 22, KSA 6 S.189) であったとされる。彼等は抑圧され、異他的な力に脅かされ、外に向かって差異の証として自らの力を放出出来ず、それゆえ彼等の権力は内へ、自己自身へと反転されてしまう。彼等病める者達をキリスト教は保護し、健康にすることなく病気のまま生かし続ける。これがキリスト教的支配者すなわち僧職者の手段であり、僧職者は猛獣を飼ひ馴らす為に病弱にさせる、僧職者は病気の者達に罪という概念を吹き込むとされる。

様々な理想はそれを持つ人間の置かれた事態に応じて生じる。人間が自らの苦境から世界をより空虚に、より色褪せた、より希薄なものに見る事態からは、「貧血症的理想 (*das anämische Ideal*)」(NF 11[138], KSA13 S.64) が生じる。そして人間が世界を、その中に尚も理想を想定したり望んだりするには余りに不条理で、わるく、惨めで、欺瞞的に感じられるものとして見る事態から生じる理想は「反自然的理想 (*das widernatürliche Ideal*)」(*ibd.*) であり、そのような状況では人間は否定し、根絶しようとする。キリスト教的理想はこの二つの場合の中間形象であるとニーチェは考える。この理想はやがて必然的に、どうなるだろうか。「我々が二千年もの長きに亘ってキリスト教徒であったことを購わねばならない時が来る。我々是我々を生かして来た重し (*Schwergewicht*) を失う (略)。我々は突然、我々がキリスト教徒でありキリスト教的理想を気が狂ったように過大評価した時と同じくらいのエネルギーをもって、反対の価値付けに陥る。」(NF 11[148], KSA13 S.69) これはキリスト教徒の運命なのである。「キリスト教の運命は、この宗教で満足させられるべき欲求が病弱で、低劣で、卑俗 (*vulgär*) であったのと同じだけ、キリスト教の信仰自体が病弱で低劣で卑俗とならざるをえなかったという必然性の内にある。」(AC 37, KSA 6 S.209)

生に苦しむ者は生を憎悪する。生への憎悪から生じた理想は彼等の苦しみを救済する。キリスト教の神は全てを見そなわす神であり、彼等が苦しんでいることを認める。苦しみを認められることが彼等にとっては先ず救いだった。此处で充たされたのは彼等の虚栄 (*Eitelkeit*)、他人に承認されたいという虚栄である。他人が認めることで自分の有り様を確認する、彼等は他人を価値の根拠としている。生を否定するものが生自身の「防衛・治癒本能 (*Schutz- und Heil-Instinkt*)」(GM III.13, KSA 5 S.366) から生まれることはあり、それが手段として有用になることがありうる。だが生が自ら生き延びようとする時、生を否定する理想を保ち続けることは出来るだろうか。

全てを見る神によって苦しむ者達の虚栄は充たされる。それと同時に、彼等は常に自分の苦しみをその神に示して見せなくてはならなくなる。神の目は彼等の内に、内面化される。やがて彼等は羞恥 (Scham) を覚え、見られていることに耐えられなくなって神を殺す。見られる者の羞恥は自覚の問題である。

4-2 ニヒリズムとしての神の死

キリスト教はそれがそれとして生じた時から既にニヒリズムであった。それは生と差異を否定するものとしてのニヒリズムということである。

ニヒリズムとはまた神の死を意味する。この神とはキリスト教の神である。キリスト教によって最も不健康な者達すなわち生理学的な (physiologisch) 意味で出来のわるい (schlechtweggekommen) 者達は生きて来られた。ではそのような者達の間で、神の死が何故起こったのか、何が神を殺したのだろうか。

キリスト教は同情 (Mitleiden) の宗教であり、同情はニヒリズムの実践であるとニーチェは考える。『ツァラトゥストラ』では同情による神の死が語られる。神にとっての地獄は人間に対する神の愛である、そして神が人間への同情のゆえに死んだ、と悪魔が言うの聞いたとツァラトゥストラは語る (ZA II. Von den Mitleidigen, KSA 4 SS.113)。同情とは羞恥の無さであり、他人の苦しみに同情してその苦しみを取り除いてやろうとするのは自らの力を他人に証明してもらわねばならない者達の弱さの裏返しと考えられる。羞恥とは、喜ばせることにせよ苦しめることにせよ他人に対して何もしてやれない自らの無力さの感情である。見ることで羞恥を覚える者と見られることで羞恥を覚える者とは人間類型が決定的に異なる。強い者、高貴な者達は同情することに羞恥を感じると語られる。彼等は他人の境遇を尊重するので、苦しむ他人を見た時に羞恥を覚える。彼等の羞恥は差異の感情において生じ、差異に耐えられる強さを示す。このような羞恥を感じるものの出来る者は、他人の羞恥心にも配慮する。キリスト教の神が人間へ注ぐ愛とは同情である。神の同情であっても同情はやはり恥知らずであるとされる。神が同情を覚えるのは人間の苦しみの全てを見通しているからである。神の同情は苦しむ者達を嘗ては癒した、神が自分達の苦境に心を痛めることで自分達の苦しみを認められたと彼等は思うからである。「苦しませることは快感情を与える」(GM II.6, KSA 5 S.300)、すなわち権力の感情を抱かせる。自分の苦しみに誰かが同情することはその誰かに対する間接的な支配でありうる。見られたがる者は見た者が自分の苦痛をそのまま受取ることを要求する。見られても構わない者、それほどに強い者ならば誤解されることに耐えられるが、見られたがる者の虚栄は誤解を許さない。

ツァラトゥストラはまた、最も醜い者が自分が神を殺したと言うのを聞く (ZA IV. Der hässlichste Mensch, KSA 4 SS.327)。最も醜い者は何時も徹底的に隅々まで神に見られ、その目撃者を許さず復讐したと言う。全てを見そなわす神は最も醜い者の羞恥を犯した為に殺されたのである。自分の全てを見た目撃者が居ることに耐えられない、その目撃者を殺すか、さもなければ自分が生きまいとする、最も醜い者はそのように言う。見られることは羞恥を抱かせる、この見られなくなさは接触恐怖症、外的刺激・異物的なものに対する過敏症であり、この過敏症は疲弊の、生理学的な出来のわるさの表れである。

神が人間への愛のゆえに死んだと悪魔が言うのと、自分を見尽くしたことが許せずに神を殺したと最も醜い者が言うのが、同じ事件について言われていることだとするとどうだろう。見られることで見られた者が羞恥を覚えるのは、その見られることで見た者が見られた者を知るだけでなく、見られた者自身が自らを知るからである。それを知ることによって自ら弱さの感情を抱くような自分の姿を知り、認めねばならなくなるから、しかし認めることが出来ないからである。最も醜い者への神の同情は彼の虚栄を充たすことは出来ない、自分の苦しみを他人に承認された者は見られたがるが、彼は誰にも見られたくないからだ。自分は醜いと知りながらその醜さを見尽くすことは出来ない、意識と身体とのこの解離は身体の不調の、「消化不良 (Indigestion)」(GM III.16, KSA 5 S.377) の表れである。最も醜い者の醜さは彼自身にとっても神にとっても堪え難いものである。そして彼の醜さはまさにそれによって彼が生きているところの彼の身体であり、それが取り除かれると彼は死んでしまう。神を殺したのは彼の生の本能である。

また、最も醜い者による神の殺害は単に彼一人にとっての事件ではなく、同じ神を立てる全ての者が必然的に至る事態である。彼等は嘗ては同情の神を必要としていた筈である。神が死ぬ前、人間に何が起こったのだろうか。見られることによってこそ生きられる者達がそのような神を立てると、同時に彼等は常にその神に見られなければならない。神の目は彼等の心の内に、内面化される。これは誠実性の血肉化という事態と同じである。道徳は血肉化されると、それへと強制する外的な圧力が必要なくなり、外的強制が機能なくなると、力は内へ、自己自身へ向かう。それは自らの行為において自らの姿を知る、自覚の時である。同情の神はもう苦しむ者を救うことが出来ない、それゆえ同情の神は死んだ。同情の神を生んだ者は余りに醜くなり過ぎた、この醜さとは何か。価値付けられない無力感と真理が認識出来ないという無力感に加えて、人間がそのようなものであるというまさにそのことについての苦しみ、自己自身であることの、自己自身についての苦しみである。神を殺す時、自己自身に苦しむ者は自らの醜さを己の身一つによって担い引き受けることが出来ない。羞恥に耐えて自分の醜さを認めることが出来ないのだ。

人間は自分が醜いということを、自分を醜くしているところのものを、神に預けるのではなく自分自身によって引受けねばならない。従来、すなわち同情の神の死というニヒリズムが克服されるとは、自分は必然的に神を殺したのであり、これ以降は神の目に見られ見守られることなしに生きて行くのだという自覚に至ることである。

5 結論 ニヒリズムとはどういう危険か

ニーチェは次のように書き残す。「私は来るべきものすなわちニヒリズムの到来を叙述しよう。(略) その徴は至る所にある、しかしその徴を見る為の目だけが欠けている。(略) 最大の危機がある、人間の余りに深い自覚 (Selbstbesinnung) の瞬間があると、私は信じる。人間が其処から回復するかどうか、この危機を征服するかどうか、それは彼の力の問題である。(略) 最終的に近代人は価値一般の批判を敢行する、そして彼は価値の由来を認識する、彼は最早どんな価値も信じなくなるほど充分に認識する。」(NF 11[119], KSA 13 SS.56) ニヒリズムの克服が、価値判断出来ないことから出来ることへの移行、真理が認識出来ないことから出来ることへの移行と言え

るとすると、其処で生じているのは価値と真理の意味付けの転換である。価値と真理は新たに、生から、権力から意味付けられる。価値判断が出来なくなっている人間に他人が価値観を与えてやることは出来ない。真理も同様に他人が授けてやることは出来ない。判断は判断する者自身を根拠とし、権威としてなされねばならない。そのような判断が出来ることが、価値転換の達成であり従来の評価様式の克服である。生を基準とした意味付け直しは、それをなす生自体の自己規定であり自己把握である。知ることが出来るとは示すことが出来るのと一体であり、自己を示すことは同時に他者との差異を示すことである。差異的な真理と価値を自己自身をもって示さねばならない。それによってこそ、自己と異他的なものとは同時に成立し、両者をそれぞれのものとして成立させる差異が保たれるのである。ニヒリズムを正常な中間状態と価値付けられることはニヒリズムの克服の一つの表れである。ニヒリズムは克服された時に克服された地点からこそ肯定的に意味付けられる。ニヒリズム批判は自分はニヒリストではないと主張することはでなく、決してニヒリズムに陥らないことでも陥らない為のものでもない。ニーチェが自分が否定的に批判するところの道徳の中で生立ったこととそれを批判することが出来る者になったこととは無関係の出来事ではない。ニヒリズムを克服した者であるには、ニヒリズムに関係する者でなければならない。従来の価値について考え抜くことすなわち価値と真理の批判が必要であるとは、それまで自らを生かして来たものについて問わねばならないということである。自分はどのような者であるかを知らねばならないということである。「人は如何にして現にあるところの者になるか (Wie man wird, was man ist.)」(EH, KSA 6 S.255) が知られねばならない。

ニヒリズムは誠実性すなわち真理への意志の必然的帰結である。そして誠実性はそれこそがニヒリズムの克服の契機でもある。これは間違いではない、しかしまだ捉え難さは残る。生に苦しむ者が嘗て必要としていた神に耐えられなくなる、この転換にあるのは真理への意志の血肉化だろうが、これを更に詳しく論じるのは以降の課題としたい。

ニーチェのニヒリズム批判から、我々は何を読み取ることが出来るだろうか、それは現在我々が抱く徒勞の感情や不確実性の不安を克服するのにどれほどのものをもたらすだろうか。我々の感情は我々のものであり、我々ではない誰かや何かに委ねたり、我々の感情の責任を他人に負わせたりすることは出来ない。それゆえ我々がニーチェを読むのは我々の確実性の感情の根拠をニーチェから与えられる為にはではない。我々がニーチェに共感し幾らか理解することが出来るなら、ニーチェは手掛かりを与えてくれる、しかしそれは根拠ではない。依然、我々の感情は我々自身によって確証されねばならないものとして残る。価値判断の根拠も自分が現にどのような者であるかの自覚も我々が自らに引受けねばならない課題である。そして何者であるかということは、この自覚は、何者であるかという問いの答えによって知られるのではなく、問うこと自体に示されている。自己自身を問うことは、それを知ること、すなわち価値付けることと同じことである。我々がニーチェをどう読みうるか、どれほどのものを受取ることが出来るかに、我々の姿は表れている。

参考文献

引用中の強調は全て原文によるものである。

ニーチェの著作からの引用は下記の全集に拠った。引用箇所には著作の略記と節番号或いは断片番号及び頁数を記す。

Nietzsche, Friedrich: *Sämtliche Werke*, Kritische Studienausgabe (KSA と略記する), hrsg. v. G. Colli und M. Montinari, Berlin/New York, 1980.

ZA : *Also sprach Zarathustra*, KSA 4

GM : *Zur Genealogie der Moral*, KSA 5

AC : *Der Antichrist*, KSA 6

EH : *Ecce Homo*, KSA 6

NF : *Nachgelassene Fragmente*, KSA 7-13

岩波哲男『ニヒリズム –その概念と歴史–』(上・下)、理想社、2005 年

渡辺二郎『ニヒリズム』東京大学出版会、1975 年

川原栄峰『ニヒリズム』講談社、1977 年

川原栄峰「ニーチェの「ヨーロッパのニヒリズムについてのレンツァーハイデ断片」をめぐって」(ギエンター・ペルトナー、渋谷治美編『ニヒリズムとの対話 –東京・ウィーン往復シンポジウム–』晃洋書房、2005 年、pp.1-20)

インゲボルク・シュスラー「ニーチェとハイデッガーにおける真理の問題」稲田知己訳(川原栄峰監訳『ハイデッガーとニーチェ 何をおいても私を取り違えることだけはしてくれるな!』南窓社、1998 年)

Javier Ibáñez-Noé: *Nietzsche: Nihilism and Culture* (in: Nietzsche Studien Bd.25, 1996, SS.1-23)

Werner Stegmaier: *Nietzsches Neubestimmung der Wahrheit* (in: Nietzsche Studien Bd.14, 1985, SS.69-95)

(いくしまひろこ 現代思想文化学・博士後期課程)

Welche Gefahr ist der Nihilismus?

Hiroko IKUSHIMA

Nietzsche ist der Denker von Nihilismus. Was bedeutet das aber ? Was sagt er mit dem Wort Nihilismus?

Hinsichtlich der zwei Punkte von Wertung und Wahrheit kann man seinen Begriff von Nihilismus begreifen. Der Nihilismus der Wertung ist die Unfähigkeit der Wertung, also das Gefühl des umsonsten Daseins, und der Nihilismus der Wahrheit ist die Unfähigkeit der Erkenntnis, also das Gefühl der Ungewißheit.

Nietzsche sagt, daß der Nihilismus die notwendige Folge der bisherigen Moral d.h. der Tugend der Wahrhaftigkeit sei, die das Christentum großzog. Er hält die christliche Moral für eine Sklaven-Moral. Sie kommt von der priesterlichen Wertungs-Weise; diese Wertungs-Weise hat in sich keinen Grund der Wertung. Die Sklaven-Moral herrscht bei Leidenden; sie haben eine feindliche Einstellung gegen das Leben, welche sie schützt und kränker macht. Ihr Ideal befiehlt ihnen die nicht-perspektivische Wahrheit zu suchen. Sie lernen den Willen zu solcher Wahrheit haben. Während die perspektivische Wahrheiten den Menschen ihr Leben möglich machen, muß der Wille zur homogenen Wahrheit sie notwendigenweise in die Ungewißheit führen.

Der Nihilismus bedeutet auch das Christentum für Nietzsche, dessen Formel die Aussage "Gott ist tot" ist. In *Zarathustra*, ist der Gottes-Tod wegen zu großen Mitleids mit den Menschen passiert und der hässlichste Mensch sagt, daß er Gott ermordet hat. Er ermordete ihn wegen des Scham, der Unlust im Gesehen-Sein. Der Gottes-Tod wegen seines Mitleids und der Gottes-Mord sind ein und dasselbe Ereignis. Die Leidenden haben den mitleidenden Gott nötig, weil das Gesehen-Werden von einem solchen Gott ihre Eitelkeit zufrieden stellt. Wenn sie das Gottes-Auge verinnerlicht haben, fühlen sie Scham; die Scham ist die Unlust für sich selbst zu sehen.

Die Überwindung des Nihilismus ist Nietzsches Aufgabe. Die Überwindung ist möglich, wenn man erkennt, wie man wird, was man ist. Erkennen ist Zeigen. Daß man sich erkennen kann, bedeutet, daß man sich und die Differenz zwischen Selbst und Fremdem zeigen kann.

「キーワード」

価値、真理、誠実性、神の死